

足元から考える森林と 社会の未来

柿澤宏昭(北大)

- つながりのなかで「今」と「ここ」を考える
- つながりの「距離」を縮める

熱帯林を守るためには何をすればよいのか？

- 木材輸入をストップすればよいのか？
- 持続的に管理している木材ならよいではないか？
- 熱帯材生産に依存して生活をせざるを得ない人々がたくさんいる
- そもそも熱帯林破壊は絶対的な悪なのか

反省される途上国援助

- 専門家が最善の知識を持っているわけではない
 - 林学の専門家がわからなかった樹種を識別して生活の中で利用している
- 優れた技術が常に良いわけではない
 - コストや他の仕事の関係で効率の悪い技術を使っている場合もたくさんある。
- 啓発が必要なのはどちらか？
 - 地元の人が環境破壊をしているのだから環境の大事さを啓発しなければならない？

「距離」を縮める

- あなたと森林
- あなたと自然
- 森林・自然に関わる人と人

森林を守るとはどういうことか？



屋久杉の原生林を「まもる」とは？



人工林をまもるとは？



それでは自然に生えてきた林は？



森林を「まもる」

- 社会が森林に何を求めているのか？
- どのような森林なのか？
- 森林をめぐる社会・経済状況は？
- 状況によって「まもる」という意味内容は異なってくる

社会の発展段階と森林利用

- 江戸時代－農業と森林の密接な関係
- 明治から昭和初期－薪炭材の供給
- 高度成長期－木材の供給
- 現在－環境機能

アフリカと日本の林産物利用の違い



森林破壊は絶対的な悪なのか？

- 黒い森で有名なドイツ
- かつては国土のほとんどが森林に覆われていた
- いったんほとんどの森林を破壊
- 森林を再生させてきたが、森林率は約3割

森を守る－変化する考え方

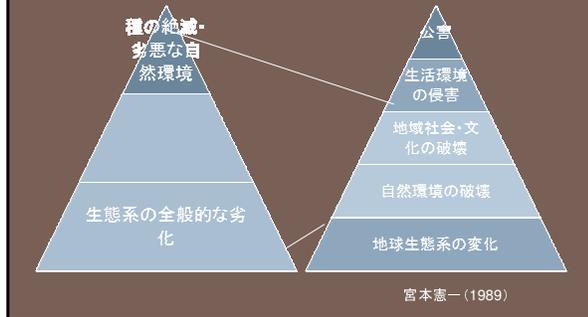
- 「良かれ」と思って一生懸命努力したのだが・・・
 - 生産性の高い森林をつくろうとしてきた、でも・・・
 - 土砂災害・洪水から人々を守ろうとしてきた、でも・・・
- 社会的要求が変化・多様化
- 「自然」に関する科学的知識が深まってきた

自然に関する知識の深化

- 生態系は閉じたシステムではない
- 複合的な影響を考える
- 複雑な時空間スケール



自然を守るということ



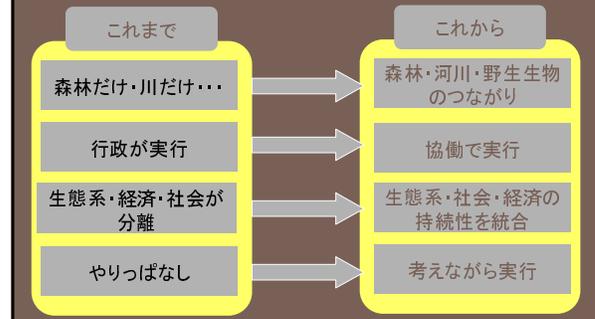
切れたつながり

- 「切り身の自然」(鬼頭秀一)
- 縦割りは役所だけではない
- 生産・加工・消費の関係が切れている
- 「顔の見える関係」の中での自然と社会のつながり

必要なことは何か

- 人と自然のつながりをつむぎなおす
 - 森とのかかわりの中で森が守られてきた
- 人のつながりをつむぎなおす
 - 人と自然の問題は、多くの場合人と人の問題
 - 「私」と「あなた」から私たちへ
 - 考え方の違いをどう扱うのか

新しい資源管理の考え方



「全体」を考える

- これまでは病巣への外科的対応
- 体質改善＝東洋医学的な考え方
- 私たちの生き方が問われる
 - 私たちは何者か、どこにいるのか

フィールドワークのねらい

フィールドワークのねらい

- 足元から考えるトレーニング
- 「最先端」を学ぶ
 - 生態系保護・森林再生、森と人の共生、循環型社会
 - 農山村にこそ最先端がある
- 「場」を認識する
 - 地理的、時間的、循環の中で
- 人との出会い

白老 北海道の「里山」づくり

- 地域住民が主体の活動
- 里山をめぐる人の輪がひろがる
- 森と人のふれあいを
- 地域づくりにむすびつける
- 先住民の森林・自然利用
 - イオル再生、壊された関係の復元



むかわ町 一次産業振興から循環型社会づくりへ

- 旧穂別町一町が中心となった農林業振興
 - 町一森林組合(森林所有者の協同組合)の協力
- 町が専門職を確保、森林管理体制の整備
- 木材を有効に利用する一木質バイオマス
- 循環型地域社会の構築に向けて



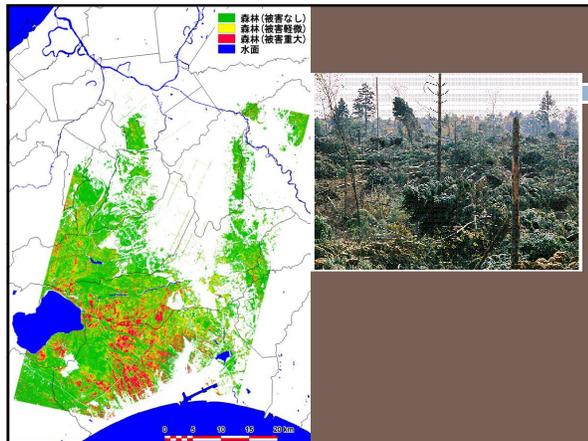
森林認証とは？

環境に配慮した森林経営を行い、そこからの生産物を消費者に選択的に購入してもらおう



支笏湖・ウトナイ湖周辺 生態系の保護・自然の復元

- 保護区の管理をめぐって 国立公園・ラムサール条約指定地
 - 開発との軋轢、利用者による影響
 - 地域制国立公園のメリットとデメリット
- 台風被害地の自然再生
 - 自然には撓乱がつきもの
 - 自然の「再生」とは？
- 外来種対策 「自然」とは何か
- NGO、政府



地域・コミュニティの重要性

- 地域によって人と森林のかかわりは様々だが...
- 森林という「場」に関わるために、地域・コミュニティという「場」が不可欠
- 地域・コミュニティは人が育つ場として重要
 - これからの森林・林業・山村の担い手
- 地域づくりと森林づくり-地域の再生と森林の再生

「専門家」の役割

- 森林管理・自然資源管理のプロフェッショナルの重要性
- 専門家がどのように市民・住民と関わるのか
- 市民のなかの専門家

「断面」から全体を考える

- 自然のサイクル-たとえば風倒
 - 50年前にも大きな被害
 - 100年、200年がかりの森づくり
- 資源の循環
 - 木材の利用は長いサイクル
- 人づくり、政策づくり
 - 地道な政策の積み重ね むかわ
 - ひとつのつながりづくり 白老

私たちができることを考える

身近なところから考える

- 足元から考えるトレーニングを
- 今回見てきたことに対してあなたはどのように関わられるのか？
- 日本の森林・自然、それをめぐる社会自体が様々な問題を抱えている
- それに対してそれぞれの地域で最前線の取り組みをしている

地域から変えていく

- 見えない方向性、方向性をはっきりさせるのは地域から
- 学校・職場を変える、地域を変える、政策を変える…
 - 自分がどう関わるか-自分が変る、自分を変える
- 「コミュニティ」「ネットワーク」づくりの重要性

私たちができることを考える 出発点は？

- 自然とのつながりをつむぎなおす
- 自然をめぐる人のつながりをつむぎなおす
 - 「私」と「あなた」から私たちへ
 - 持続可能な社会経済の仕組みを足元からつくる
- 知ろうとする努力、健全な想像力を育てる
 - 「遠さ」をまず認識する
 - 遠くてもつながりを持つ

連携するとは……

- 個々の主体が確立していないところに連携はない
- しかし、主体形成は難しい-助け合ってお互いに高めあう連携
- 一人ではできないことを連携で可能にさせる
- 誰と連携するのか

健全な想像力を育てるために

- すぐに「わかった気」にならない
- 人との見解の違いを恐れない
- 議論をする
- 「遠い」ことを認識した上で距離を近づける